

[論文]

# ヤコウガイ大量出土遺跡の検討 —— 6～8世紀奄美大島の4遺跡を対象に——

木下尚子

## New Discussions on Shell Trade

Based on archaeological sites in Amami Ōshima from the 6th through 8th centuries with large amounts of excavated shells from Great Green Turban Snails

Naoko KINOSHITA

### 要旨

近年、奄美大島における遺跡の発掘調査で、6世紀から8世紀の島の人々が、ヤコウガイを大量に採取していたことがわかってきた。こうした遺跡をヤコウガイ大量出土遺跡とよんでいる。本稿は、その代表的な4遺跡を対象に、出土したヤコウガイ三千余個を悉皆的に計測して当時の人々の採取状況を復元し、ヤコウガイ大量出土遺跡の成り立ちを検討したものである。計測値の分析により以下を明らかにした。

- ・ヤコウガイ大量出土遺跡では、遺跡人自らが採取したヤコウガイのほかに、外部からも貝殻が集められている。
- ・ヤコウガイ大量出土遺跡は、通常のヤコウガイ採取に加えて、全ての大きさの貝殻を遺跡に集積し、ことに小型・中型のヤコウガイを大量に採取することで成立している。
- ・ヤコウガイの採取と殻の集積行為は、大型貝を中心に全ての大きさのものを対象とする初段階から、一般的な採取バランスにもどる段階を経て、小型貝を中心に全ての大きさのものを採る終末の段階に変化する。

キーワード：奄美大島、ヤコウガイ大量出土遺跡、6～8世紀、殻径復元、マツノト遺跡、フワガネク遺跡、用見崎遺跡、安良川遺跡

### 1. はじめに

ヤコウガイ〔夜光貝 *Turbo (Turbo) marmoratus* Linnaeus, 1758〕は、サザエに似た形の径18cm前後の大型巻貝である。種子島以南の暖かい海にすみ、分厚い殻と蓋をもつ（奥谷2000、p.95）。この貝は肉量が多く美味で、また

その湾曲した貝殻は容器への加工がたやすいため、先史時代以来、琉球列島の人々にとって利用価値の高い食料であった。

ヤコウガイ大量出土遺跡<sup>(1)</sup>とは、ヤコウガイが集中して大量にのこる6～8世紀（兼久式期）の遺跡のことで、奄美大島北部の笠利半島で多くみつまっている。これまでに笠利町マツノト遺跡で1228個、用見崎遺跡で232個、安良川遺跡で617個のヤコウガイが確認されている。

特定の時期に、これほど多くのヤコウガイが採られたのはなぜなのか。奄美人が貝製の容器（匙形）を大量に製作し本土に輸出していたから（高梨2000）、あるいは、螺鈿素材として中国（唐）に貝殻を提供していたから（木下2000）とする考えが、これまでに提示されている。しかし、対応する時期の本土において、奄美で出土するようなヤコウガイ容器を遺跡で確認したり、唐螺鈿に奄美産ヤコウガイが確かに使用されたことを検証したりすることは現実に容易ではなく、ことに後者について作業は進展していない。

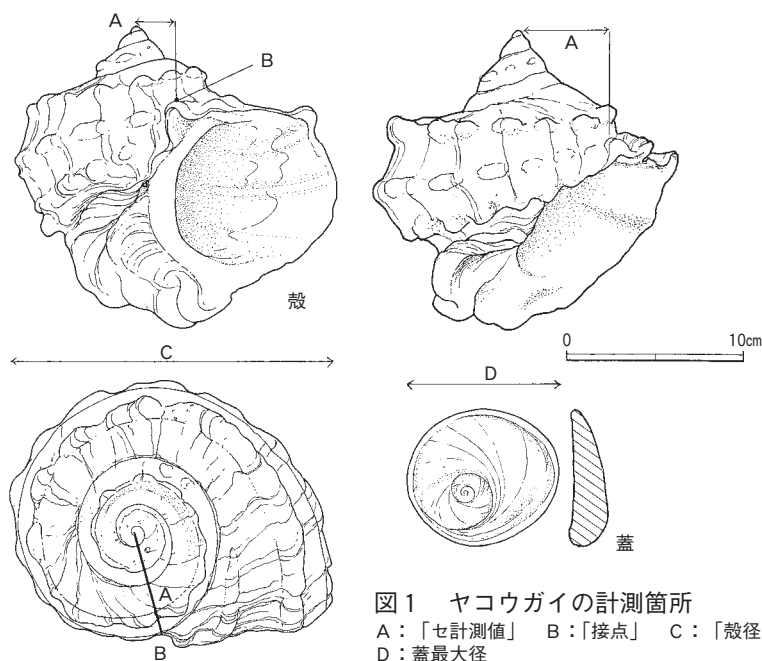


図1 ヤコウガイの計測箇所

A:「セ計測値」 B:「接点」 C:「殻径」

D:蓋最大径

「」内の呼称は本稿に限って使用するもの。



写真1 マツノト遺跡（奄美大島笠利町）  
包含層を露出した状況。右側が海。

写真2 マツノト遺跡のヤコウガイ出土状況  
白砂層上。(いずれも1991年8月1日撮影)



さて最近、ヤコウガイ大量出土遺跡のヤコウガイの整理作業が進み、貝殻そのものの分析が可能になってきた。これまで必ずしも十分に検討されてこなかったヤコウガイの個体別分析は、研究の基礎資料として、この問題の解決にも有用である。2005年、わたしは関係遺跡の発掘担当者等の協力を得てヤコウガイ大量出土遺跡3遺跡（マツノト遺跡、用見崎遺跡、安良川遺跡）においてその大きさを計測し、これをもとに6～8世紀におけるヤコウガイ大量出土遺跡の時間的推移を、以下のように整理した。

第一段階：ヤコウガイ大量捕獲の開始期。ヤコウガイを悉皆的に採取。

第二段階：大量捕獲盛期。捕獲・集積において大型貝への収斂性が高い。

第三段階：大量捕獲終末期。ヤコウガイ資源が枯渇し、大型貝<sup>(2)</sup>は激減、捕獲は小型貝に集中する。

## 1. 問題の所在と今回の作業

前回の調査では、遺跡出土のヤコウガイを、以下の方法によって分析した。出土したヤコウガイを貝殻と蓋に分け、それぞれについて殻径、最大径を個

別に計測した（図1）。貝殻が破片の場合、1個体と認識できる破片については部位を特定して計測し（セ計測値と仮称）、現生の貝殻データをもとにこの部位から殻径<sup>(3)</sup>を復元する直線回帰式を求め、これによって本来の大きさを復元した<sup>(4)</sup>。蓋も同様に、現生の貝殻データをもとに、最大径から殻径を復元する直線回帰式を得、対応する貝殻の殻径を割り出した<sup>(5)</sup>。このようにして、貝殻をもとにして得た殻径と、蓋をもとに算出した殻径を個別に得、これらを殻径の大きさごとに整理してグラフに示した。ここでの蓋の数値は、遺跡人がじっさいに採取したヤコウガイ生体の数を反映しているとみていい<sup>(6)</sup>。一方、殻については、それ自体に素材価値があるため、遺跡間を移動した可能性もあり、出土数が遺跡で採取された数を示すとは限らない。遺跡にのこされたヤコウガイの殻と蓋の意味はこのように異なるが、採取されたヤコウガイがそのまま遺跡に残されていれば、大きさごとの殻の数値と蓋の数値とは重なるはずである。

以上をふまえて、マツノト遺跡の場合をみよう（図2、2006年2月作成）。マツノト遺跡の蓋による大きさの分布と殻によるそれは、明らかに対応していない。すなわち殻径9.1cmから19.0cmの大きさの貝殻については、殻の数が蓋の数を大きく上回っている。したがってこの部分については、かなりの数の貝殻が遺跡に持ち込まれていたとみることができる。このように、ヤコウガイの殻の大きさを復元することで、当時の人々の採取活動の一面を具体的に把握することができる。

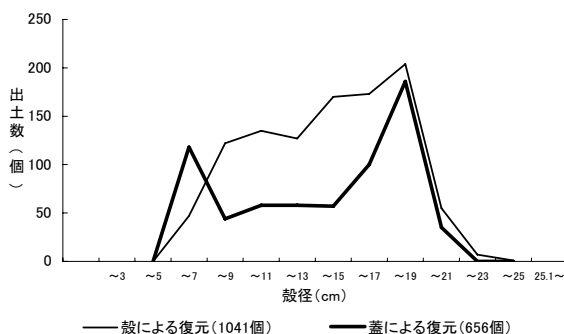


図2 ヤコウガイ殻の大きさ分布(マツノト遺跡)  
(2006年の分析結果)

前回の作業では、貝殻の直線回帰式を、貝殻については現生貝37個体、蓋については同じく27個体から複数種求めたが、これらを遺跡出土のヤコウガイで検証したところ<sup>(7)</sup>、殻径復元値と計測値の間に無視できない差が存在した<sup>(8)</sup>。殻径復元におけるこうした不安定さをなくすために、今回以下のような改善をおこなった。

#### ○殻による殻径の復元方法

以下の2関係式を遺跡出土の完全なヤコウガイで検証し、より確実な結果を導いた関係式を採用する。

- ・新たに計測した奄美大島産現生貝54個をもとに導いたセ計測値と殻径の関係式<sup>(9)</sup>。
- ・遺跡出土の完全なヤコウガイについて導いたセ計測値と殻径の関係式。

#### ○蓋による殻径の復元方法

蓋と殻の対応は現生貝でのみ確認できるので、蓋と殻の対応が確実な奄美大島産現生貝86個のデータをもとにして殻径復元の関係式をもとめ、これによる復元値と計測値を比較して正確さを確認し、復元の関係式とする。

今回、ヤコウガイ大量出土遺跡であるフワガネクのヤコウガイの計測が実現した。以下にその結果を示し、あわせてヤコウガイ大量出土遺跡について再検討したい。

## 2. ヤコウガイの殻径復元

### 2. 1. 殻による復元

#### 2. 1. 1. 復元式の決定

奄美大島産の現生ヤコウガイ54個を対象に、セ計測値と殻径を計測してその関係を求めた(図3)。R<sup>2</sup>は0.934で、あった(現生貝係数と仮称)。

一方、前回計測の対象とした奄美大島の3遺跡(マツノト遺跡、用見崎遺跡、安良川遺跡)ならびに奄美大島フワガネク遺跡<sup>(10)</sup>出土のヤコウガイのうち、完全な形をのこすものを対象に、セ計測値と殻径をもとめ、同様にその関係を求めた。次に現生貝係数と出土貝係数もちいて、遺跡ごとに、出土貝のセ計測値をもとに復元した殻径をだし、計測した殻径と比較してどちらがより正確に殻径を復元しているかを比較することにする。

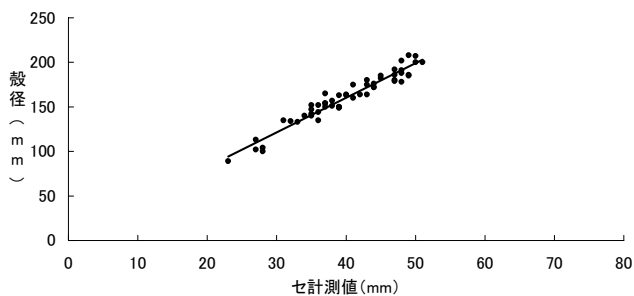


図3 現在のセ計測値と殻径(奄美大島産 54個)  
R2: 0.934

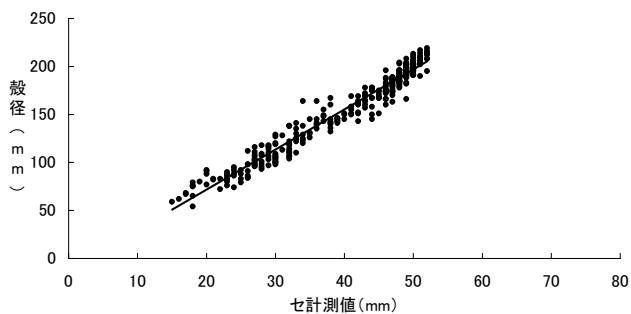


図4 ヤコウガイのセ計測値と殻径(マツノト遺跡 369個)  
R2: 0.960

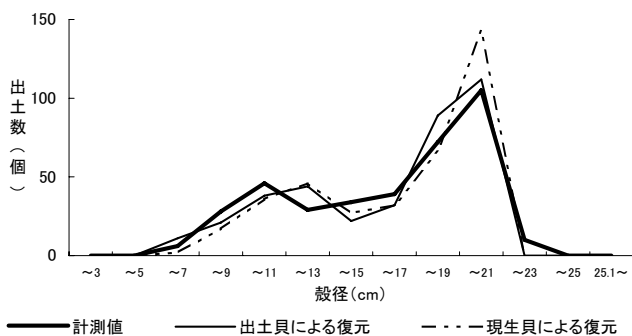


図5 殻径復元方法の比較(マツノト遺跡 369個)

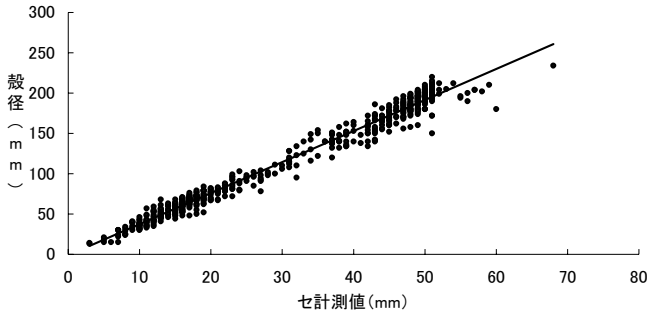


図6 ヤコウガイのセ計測値と殻径(フワガネク遺跡 614個)  
R2:0.980

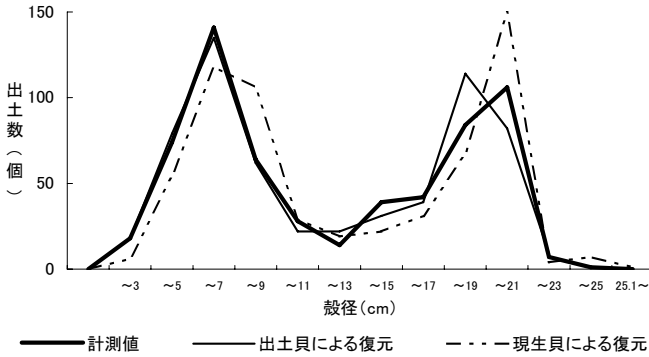


図7 殻径復元方法の比較(フワガネク遺跡 614個)

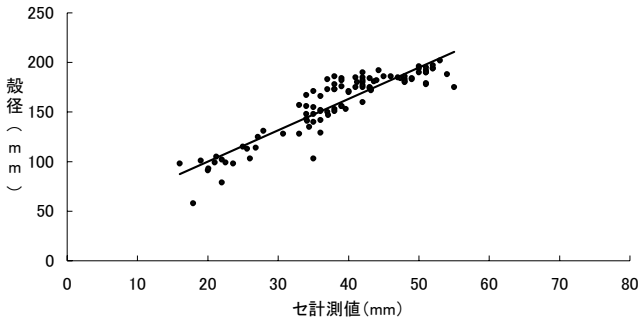


図8 ヤコウガイのセ計測値と殻径(用見崎遺跡 97個)  
R2:0.831

マツノト遺跡について検討しよう。図4は遺跡出土の完全な貝殻369個の計測結果で、 $R_2$ は0.960である（出土1係数と仮称）。図5はこれと現生貝係数によって同じ369個の殻径を復元した結果である。出土貝係数による復元の方が計測値に近いことがわかる。2種類の復元値は出土数のピークとともに正しく復元しているが、殻径9.1～11.0cmのピークについては正しく復元できておらず、これが1メモリ大きい11.1～13.0cmになっている。

フワガネク遺跡についてみよう。図6が出土貝614個の計測にもとづく結果で、 $R_2$ は0.980である。二つの係数を比較すると（図7）、全体に出土貝係数による復元が計測値に近いが、大型貝のピークを復元できていない。

用見崎遺跡をみよう。図8が出土貝97個による計測結果で、 $R_2$ は0.831である。二つの係数を比較すると（図9）、どちらの係数による復元でも、ピークを正しく復元できていない。ただ全体的にみると計測値により近いのは、出土貝係数による復元である。

安良川遺跡では、101個について係数を求めた（図10）。 $R_2$ は0.786である。二つの係数を比較すると（図11）、どちらの係数による復元でも、ピークを正しく復元できていないが、出土貝係数によるものが明らかに計測値に近い復元をしている。

以上から、出土貝係数を用いた方が、現生貝係数を使うより、より高い精度で殻径を復元できることがわかった。しかし出土貝係数が必ずピークを正しく復元しているとは限らない。図5、7、9、11で確認した復元の誤差に注意しつつ、遺跡ごとの復元値を判断する必要がある。

## 2. 1. 2. 殻径復元

4遺跡について殻径の復元を行なう。その際出土ヤコウガイの殻径を計測できたものについてはこれを使用し、それ以外の破片についてはセ計測値にもとづく復元値をもちい、これの合計で全体の傾向を示すことにする。

マツノト遺跡についてみよう（図12）。殻径19.1～21.0cmにピークがきている。全体の傾向は出土貝による結果とほぼ同じ傾向を示すので、この結果は妥当なものともみていいだろう。これを前回おこなった結果（図2）と比較すると、殻のピークが1メモリ分大きくなり、前回とは異なる分布状況に導かれたことがわかる。



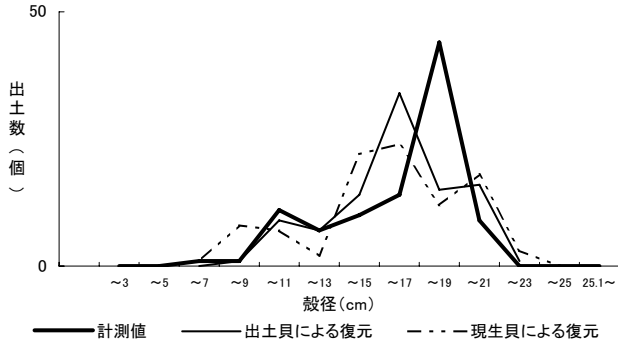


図9 殻径復元方法の比較(用見崎遺跡 97個)

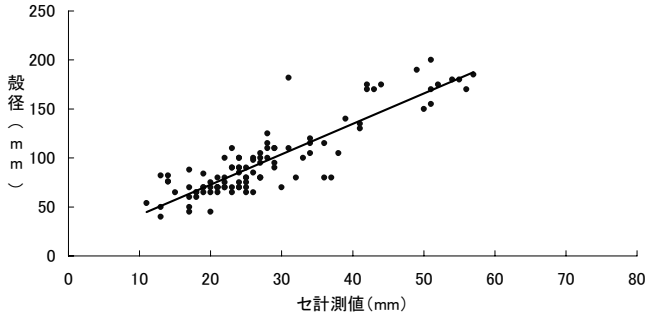
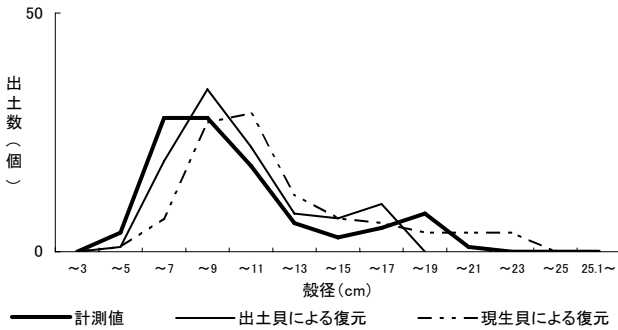
図10 ヤコウガイのセ計測値と殻径(安良川遺跡 101個)  
R2:0.786

図11 殻径復元方法の比較(安良川遺跡 101個)

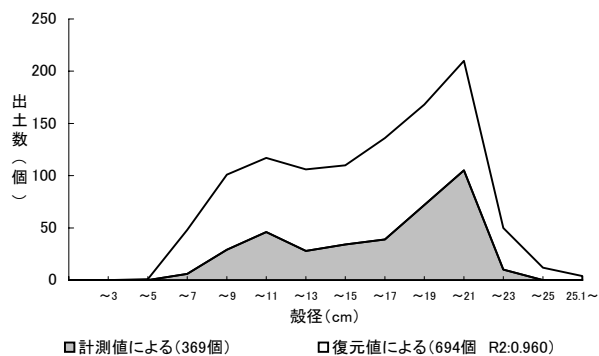


図12 ヤコウガイの大きさ分布(マツノト遺跡 1063個)

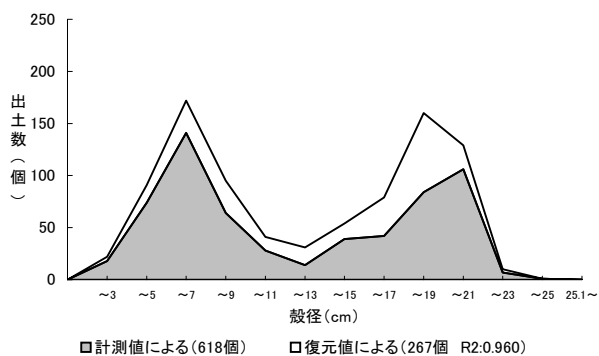


図13 ヤコウガイの大きさ分布(フワガネ遺跡 885個)

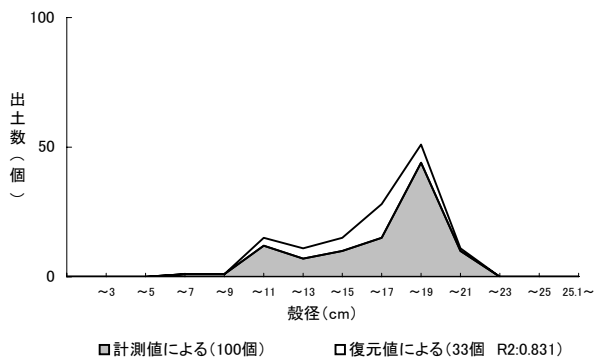


図14 ヤコウガイの大きさ分布(用見崎遺跡 133個)

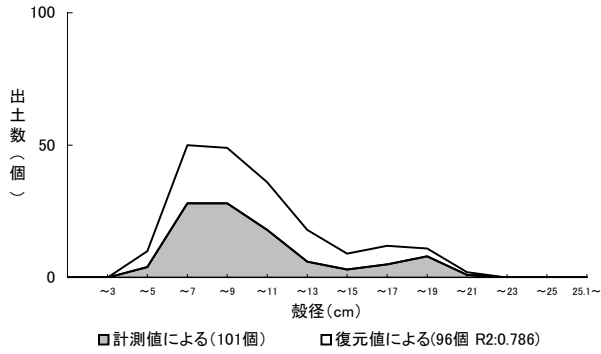


図15 ヤコウガイの大きさ分布(安良川遺跡 197個)

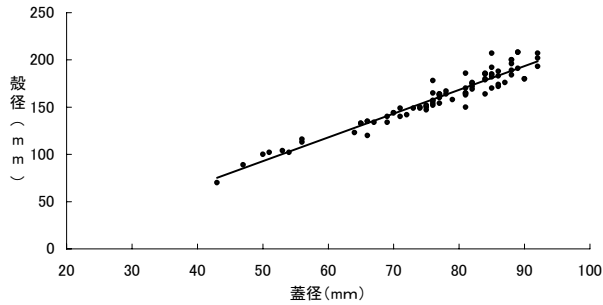


図16 ヤコウガイの蓋と殻径(奄美大島現生貝 86個)

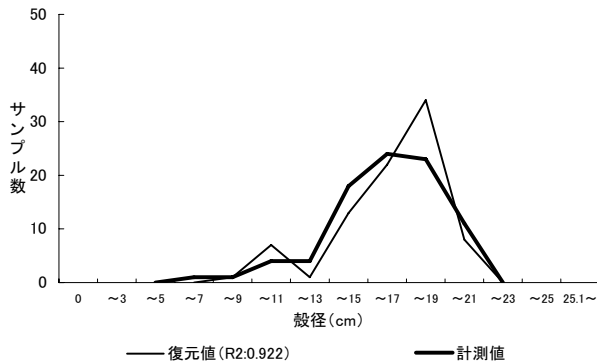


図17 殻径の計測値と蓋による復元値(奄美大島産 86個)

フワガネクでは、計測値と復元値はほぼ並行の関係を示すが、大きい方のピークが、計測値では19.1～21.0cmであるのに対し、復元値では1メモリ分小さくなっている(図13)。先の図7を参考にすれば、復元時の誤差に影響された恐れがある。図13の大型貝についてのピークは、現在の17.1～19.0cmから19.1～21.0cmよりに移動する可能性が高いだろう。

用見崎遺跡、安良川遺跡では、計測値と復元値はほぼ並行の関係を示し、問題はない(図14、図15)。

## 2. 2 蓋による復元

図16は現生ヤコウガイの蓋と殻径の関係を示すもので、 $R^2$ は0.922である。図17はこれを同じ再び現生貝にたいして復元し、その精度をみたものである。復元値は計測値とほぼ重なるが、ピークが実際より大きくなっていることに注意する必要がある。

## 2. 3 殻と蓋による大きさの分布の復元

2. 1. 2. で求めた殻による殻径分布グラフに、2. 2で求めた蓋による復元結果を重ねてみた。遺跡ごとにみていこう。

マツノト遺跡では(図18)、全体に殻が蓋より多く遺跡にのこされており、遺跡外から貝殻がもちこまれていたことが推測される。

フワガネク遺跡では(図19)、殻による復元の分布傾向と殻によるそれとが対照的である。マツノト遺跡と異なり、小さな貝殻が大量に持ち込まれている。マツノト遺跡と同様、超大型の殻が、遺跡に持ちこまれている。

用見崎遺跡では(図20)、蓋、殻ともに大型に偏った分布をなし、大型の殻の遺跡への持込みが顕著である。

安良川遺跡では(図21)、採取貝全体が小型に偏り、蓋数が殻数を大きく上回っている。殻のもちこみの認められない点は、他の3遺跡と大きく異なっている。

以上4遺跡について、遺跡出土のヤコウガイの大きさ分布を復元したが、これらのうちフワガネク遺跡を除く3遺跡については、前回と重複して結果をだした。結果が今回と同じだったのは用見崎遺跡だけで、マツノト遺跡で

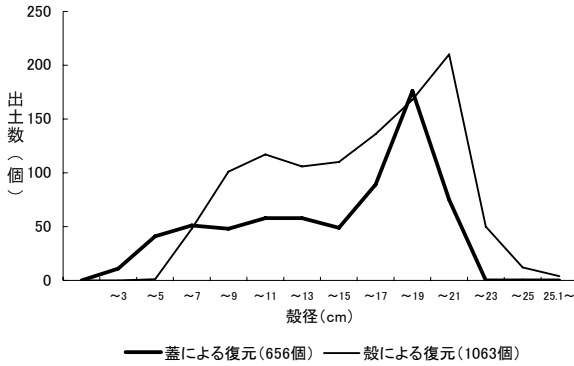


図18 ヤコウガイの大きさ分布(マツノト遺跡)

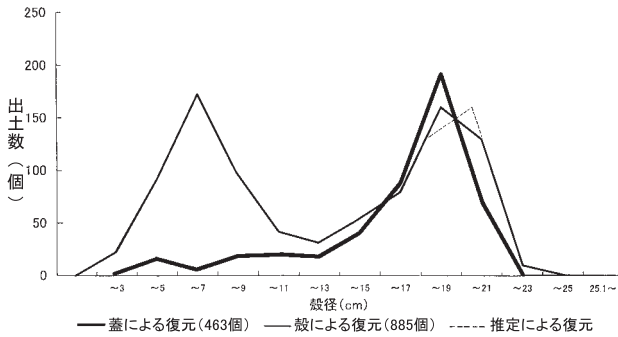


図19 ヤコウガイの大きさ分布(フワガネク遺跡)

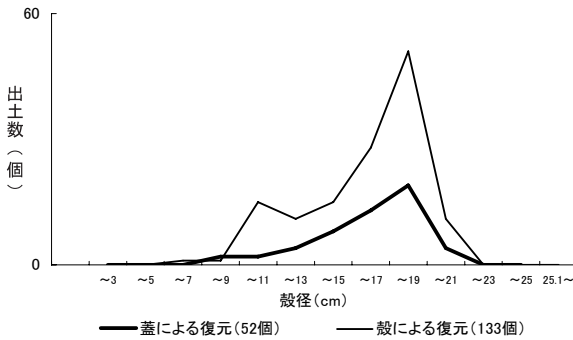


図20 ヤコウガイの大きさ分布(用見崎遺跡)

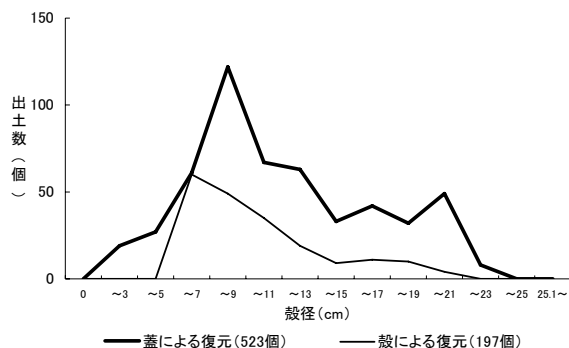


図21 ヤコウガイの大きさ分布(安良川遺跡)

は、殻による復元値のピークが1メモリ大きい方に移動し、安良川遺跡では蓋による復元値のピークが1メモリ大きい方にずれた。

### 3. ヤコウガイ大量出土遺跡の再検討

#### 3. 1. 段階的整理

今回修正した方法によって求めた殻径の復元結果をもとに、ヤコウガイ大量出土遺跡におけるヤコウガイの採取・消費動向を再度整理しよう。なお、4遺跡の早晩の関係は、いまだ兼久式土器の編年について研究者間に考えの幅があるため<sup>(11)</sup>、みずからおこなった作業の暫定的な結果に拠った。すなわち、早い方からマツノト遺跡(第1文化層 古層)、フワガネク遺跡(第1次調査区、第2次調査区)、用見崎遺跡(3層)、安良川遺跡の順である。これらを前回と同様、3段階にわけて整理した(表2)。

図22～図25は、図18～図21をもとに、遺跡で採取された貝殻数ともちこまれた数を、遺跡ごとに示したものである。これらの遺跡について、以下を指摘できる。

- ・ヤコウガイ大量出土遺跡において、ヤコウガイ殻が外部から単独にもちこまれ、遺跡に集積されていた可能性は高い。
- ・殻の集積は、全ての大きさのものが集積された初段階から、大型貝の集積に収斂する中段階を経て、集積されない終段階に変化するとみられる。

- ・採取されたヤコウガイは、大型貝を中心に全ての大きさのものを採る状況から、大型貝を中心に採取する状況を経て、小型貝を中心に全ての大きさのものを採る状況に変化する。

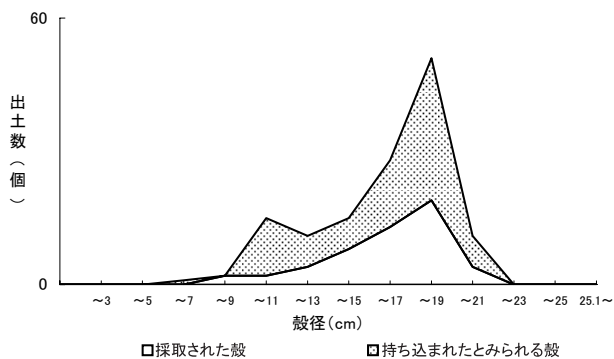
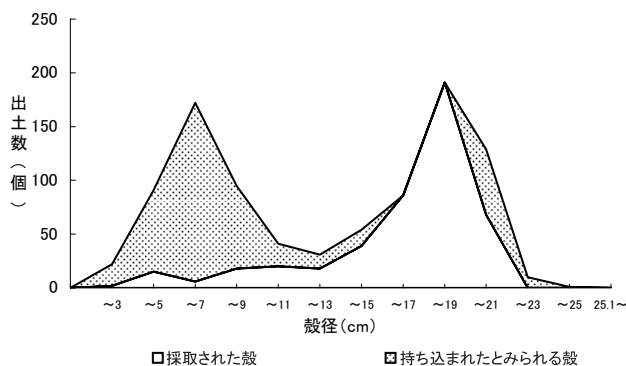
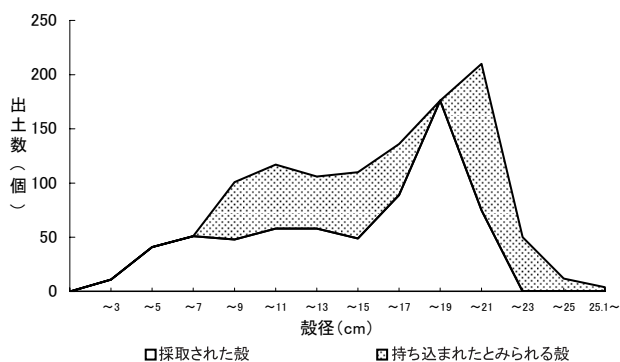
### 3. 2. ヤコウガイ大量出土遺跡の特性

図26はヤコウガイ大量出土遺跡以外の、時期の異なる遺跡において採取されたヤコウガイの大きさの分布状況である<sup>(12)</sup>。いずれも殻径17.1～19.0cmにピークがあり、正規分布に近いかたちをとる。これが、人々がヤコウガイを採取する際の自然なあり方とみていいだろう。このことをふまえれば、フワガネク遺跡（図23）や用見崎遺跡（図24）の採取傾向は、とくに大型貝を意識したというほどのものではなく、むしろ一般的な採取状況であったといえる。

これに対し、マツノト遺跡（図22）は小型・中型の貝が多いことで、安良川遺跡（図25）はピークが小型の貝にあることによって、一般的な採取状況から大きくはずれている。また、小型・中型貝が多い点では、フワガネク遺跡も一般的なあり方と状況を異にしている<sup>(13)</sup>。以上から、ヤコウガイ大量出土遺跡は、通常ヤコウガイ採取行為に加え、あらゆる大きさの貝殻を集積し、かつ小型・中型貝を集中的に採取することで出現するにいたった遺跡であると理解される。

表2. ヤコウガイ大量出土遺跡の動向（6～8世紀）

段階	採取の特徴	貝殻の殻径ピーク (cm)		対応する遺跡
		採取貝	搬入貝	
初段階	ヤコウガイ大量捕獲の開始期。ヤコウガイを悉皆的に採取し、かつ集積する。	17.1～19.0	5.1～7.0 19.1～21.0	マツノト遺跡 フワガネク遺跡
中段階	大量捕獲継続期。捕獲・集積において大型貝への収斂性が高い。	17.1～19.0	17.1～19.0	用見崎遺跡
終段階	大量捕獲終末期。大型貝は激減し、捕獲は小型貝に集中する。	7.1～9.0	なし	安良川遺跡





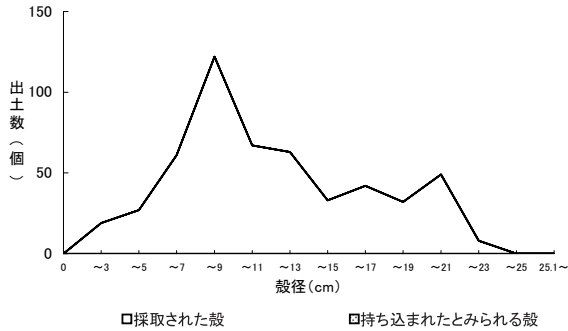


図25 ヤコウガイの存在状況(安良川遺跡 523個)

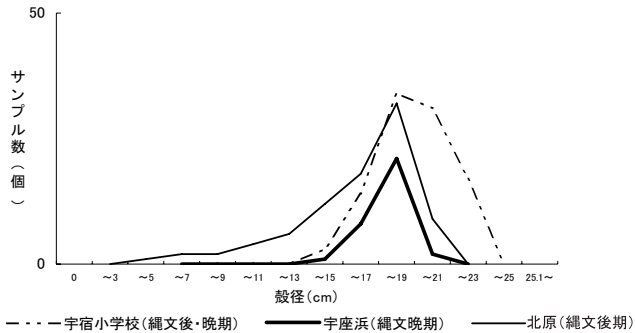


図26 ヤコウガイの採取傾向(奄美大島、沖縄本島、久米島)

### 3. 3. ヤコウガイ貝殻と貝製品の対応

マツノト遺跡、フワガネク遺跡では、ヤコウガイ貝殻のほかに、ヤコウガイ製の容器（貝匙）と貝錘（有孔製品）が多数出土している。以下にこれらについて分析し、ヤコウガイがそれらの製品素材として採取されたのか否かを検討しよう。

ヤコウガイ製品を見てそこから貝殻本来の大きさを推測するのは容易でないが、貝殻のどの部分を使用したかの推測は比較的容易である。ヤコウガイの破損が、製品加工の結果だとすれば、貝殻の破損部分と、遺跡出土のヤコウガイ製品の貝殻における部位は対応するはずである。ヤコウガイの部位をあらかじめ図27のように分け、製品の使用部位と、貝殻の残存部位（あるい

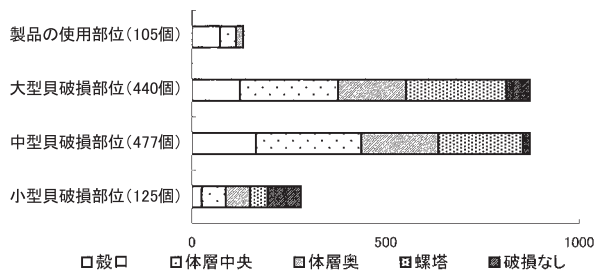
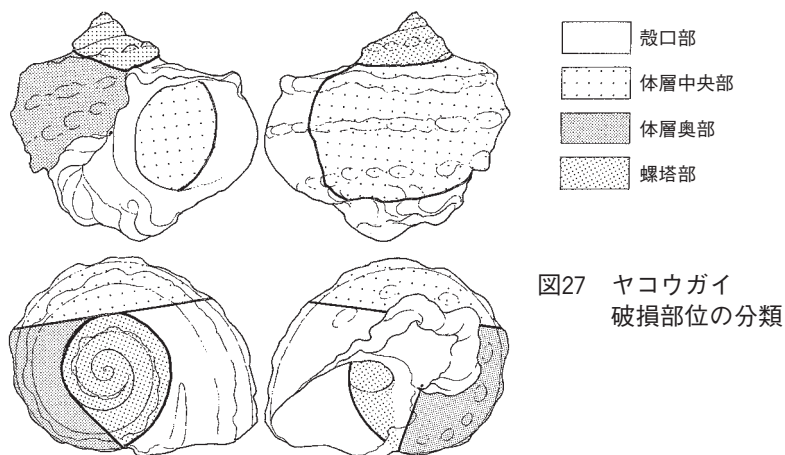


図28 ヤコウガイ製品と貝殻破損部位の対応(マツノト遺跡)

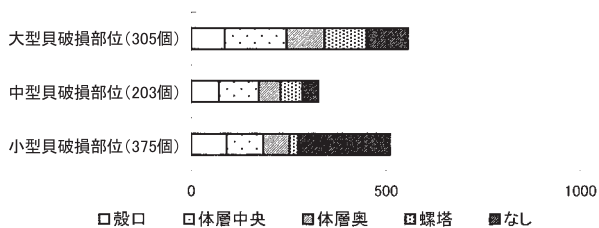


図29 ヤコウガイ製品と貝殻破損部位の対応(フワガネク遺跡)

は破損部位)との対応関係をみてみた。

マツノト遺跡出土のヤコウガイ製品105点については、報告書からその使用部位を推定することができる(鳥袋2006)。図28でわかるように、製品の使用部位は殻口部がもっとも多く(グラフ上段)、これに体層中央部が続く。しかし貝殻における殻口部の破損の割合は他部の破損に比べてむしろ少ない。マツノト遺跡において、ヤコウガイ製品と貝殻破損部位との間に、はっきりした対応関係は認められないようである。

フワガネク遺跡では貝匙製作跡が確認されており、遺跡全体でこれまでに貝匙91点と有孔製品44点が出土している(高梨2005、pp.141～144)。貝殻について整理しよう<sup>(14)</sup>(図29)。フワガネク遺跡では、製品に利用されることの多い殻口部と体層中央部の破損数が、その他の部位の破損数より明らかに多い。貝匙がヤコウガイの殻口と体層中央部で作られることをふまえば、これはこの部分が製品として失われたことを示し、貝匙製作跡の存在と対応するのかもしれない。しかし、フワガネクのヤコウガイの多くが貝匙の素材であったならば、殻口と体層中央部にさらに偏った破損がみとめられていいだろう。フワガネク遺跡ではたしかに少なからぬ貝匙が製作されていたが、貝殻破損のデータからみる限りその消費量はヤコウガイ全体の一部であった、というのが現状に近いのではないだろうか。

ヤコウガイ大量出土遺跡のヤコウガイは、容器などの素材になっていたが、遺跡のすべての貝殻がそのために集められたとみるには、製品と貝殻の破損状況の対応が十分ではない。ヤコウガイ大量出土遺跡には、遺跡の人々の消費を上回る数量のヤコウガイ殻が集められていたとみることができよう。

#### 4. 結語

- ・6～8世紀に比定される奄美大島のヤコウガイ大量出土遺跡4箇所を対象に、3041個のヤコウガイを分析して、当時の採取状況を復元した。分析では前回の殻径復元方法を改善し、改めて結果をだした。全体の結論は前稿とほぼ同じであるが、これに至る説明や解釈を一部改めた。
- ・ヤコウガイ大量出土遺跡は、人々が通常のヤコウガイ採取に加え、全ての大きさの貝殻を集積し、かつ小型・中型貝を集中的に採取することで

登場した遺跡だと考えられる。

- ・ヤコウガイ大量出土遺跡におけるヤコウガイの消費は、大型貝を中心に全ての大きさのものを採取して貝殻を大量に集積する初段階から、大型貝を中心とする通常の状況にもどる段階を経て、小型貝を中心に全ての大きさのものを採取する終段階に至る、と推測される。
- ・人々が遺跡にヤコウガイ殻を集積した主目的は、製品製作用の素材の確保だけではなかった可能性が高い。

小稿は総合地球環境学研究所の共同研究「日本列島における人間―自然相互関係の歴史的・文化的検討」(研究代表者:湯本貴和 平成18~22年)の一環として、平成18年8月8日31日~9月2日に奄美大島奄美市で実施した考古学調査の結果である。調査は、清水恒志(熊本大学文学部4年次生)、高平愛子(同前)、木下が実施した。

小稿をまとめるにあたり黒住耐二氏、篠藤まりあ氏、高梨修氏、当山昌直氏、中山清美氏、湯本貴和氏に教示を賜り、木下丈之氏に協力いただいた。奄美市教育委員会には調査に際して多くの便宜をはかっていただいた。末筆ながら記して感謝いたします。

#### 注

- (1) ヤコウガイ大量出土遺跡とは高梨修氏によって1998年に定義された概念で、兼久式期の奄美大島北部においてヤコウガイを大量に出土する遺跡を典型としている(高梨1998)。
- (2) ヤコウガイの大きさの分布傾向を根拠に、以下のように呼び分ける。なお前稿(木下2006)でも同様に基準を設けたが、分類の根拠とした分布状況が前回と今回とで異なっているため、今回改めて分類した。  
 大型:殻径17.1cm以上のヤコウガイ(殻径19.1cm以上を超大型とする)  
 小型:殻径9.0cm以下のヤコウガイ  
 中型:大型と小型の中間の大きさのヤコウガイ
- (3) ヤコウガイを、殻口を下にして水平面に置きこの位置における最大径を、ここでの殻径とした。したがって通常いわれる貝殻の最大径より若干小さくなっている。
- (4) 琉球列島産の現生貝37個から得たセ計測値と殻径の回帰式の $R^2$ (ピアソンの積率相関係数)は0.937であり、二つの変数の関係は高いといえる。ピアソンの積率相関係数とは、2変数間の直線的関係(一方が増えると他方がそれに従って増える、あるいは減るといった関係)が、どのくらいあるかを示す指標で、これが0.7~1.0であれば強い相関関係があるとされる。
- (5) 琉球列島産の現生貝27個から得た蓋最大径と殻径の回帰式の $R^2$ は0.970であり、二つの変数の関係は高い。
- (6) ヤコウガイの蓋はサザエの蓋同様、身に密着しているため、その出土数は食料として消費された量を反映するとみられる。また蓋を素材として珍重する習慣は、琉球列島の先史時代に認められず、蓋の移動は考え難いため、出土数を遺跡での採取数と判断した。
- (7) 検証は、現生ヤコウガイのセ計測値と殻径の関係をともに、殻径のわかっている出土ヤコウガイのセ計測値から殻径を復元し、実際の数値との差をみる方法をとった。
- (8) 最も高い $R^2$ をもつ殻径復元式によっても、大きさの分布のピークは、計測と1メモリ分(2cm)ずれた。木下2006文献の図12-1ならびに図12-2参照。

- (9) 以前使用した計測値は、ヤコウガイの産地にばらつきがあり、計測方法にも若干の粗密があったので、新たに統一的方法で計測した。
- (10) 4 遺跡の概要は以下のとおりである。

表 1. 分析をおこなった奄美大島所在の 4 遺跡の概要 (6 世紀～8 世紀)

遺跡名	所在地	遺跡の種類	調査面積、調査年	文献
マツノト遺跡 (第 1 文化層 古層)	奄美市笠利町 とらり 土盛	生活跡 (住居址、貝集積)	440m <sup>2</sup> 1991年、2004年	中山清美1992、1996 笠利町教育委員会2006
フワガネク遺跡 (調査区 3、11)	奄美市小湊	生活跡 (住居址、貝札製作跡)	700m <sup>2</sup> 1996年	名瀬市教育委員会2003
用見崎遺跡 3 層	奄美市笠利町 用	生活跡 (住居址、貝集積)	100m <sup>2</sup> 1995年、1997年	笠利町教育委員会1995 若杉あずさ編1998
あらごう 安良川遺跡	奄美市笠利町 用	生活跡	198m <sup>2</sup> 2003年	笠利町教育委員会2005

- (11) 兼久式土器の編年については中山清美氏、高梨修氏、中村友昭氏による考えが出されている(中山2005、2006a、2006b、高梨2005、中村2006)。
- (12) 図26は、前稿(木下2006)の図16、図18で示したものと同じデータを、今回新たに得た係数により復元した結果である。前回のピーク値は15.1～17.0cmだが、今回のそれは17.1～19.0cmとなった。前回の値によると、縄文時代の遺跡出土のヤコウガイのピーク値が兼久式期のそれより1メモリ小さいことになるが、今回の値では両者は同じである。前稿では前者を根拠に、ヤコウガイ大量出土遺跡の人々が大型のヤコウガイを意図的に採取したとしたが、一概にこのようには言えないことになる。前稿での考えを改めたい。
- (13) 小型貝の貝殻の移動について、オカヤドカリとの関係を指摘したことがある。ヤコウガイ大量出土遺跡はすべて海岸に面した砂丘にあり、背後に林のあったことが想定できるオカヤドカリの繁殖地である。じっさい遺跡出土のヤコウガイにもオカヤドカリの使用した痕跡をのこすものがしばしば認められる。その痕跡は、巻貝の軸唇に特有の痕跡が認められたり、殻軸に砂上を引きずった磨耗痕跡が残っていたりするので、それと判断できる(黒住耐二氏教示)。黒住氏によると、殻サイズ(殻高または殻径)6cmから10cmまでの貝殻は30～40%の頻度でオカヤドカリ類による利用が認められるという(黒住1987)。前稿(木下2006)において、マツノト遺跡では殻径7cm以下の貝殻の殻数が、対応する蓋数の半分だったので、オカヤドカリが宿貝として遺跡から持ち去ったと理解した。これは99個で、出土貝全体の9%にあたる。ただフワガネクの小型ヤコウガイについて、貝殻にこうした痕跡を認めることはできなかった。また「小型ヤコウガイの打上はかなり稀であり、これだけの数が死後打ちあがっている状況は想定しにくい」(黒住氏教示)ので、これにオカヤドカリが入って遺跡に至った可能性は低いだろう。小型・中型の貝殻のオカヤドカリによる移動はある程度想定しなければならないが、その前提としてやはりヤコウガイそのものがどこかで採取されていない。
- (14) フワガネク遺跡のヤコウガイ製品の詳細は近日中に刊行されると聞く。

文献

奥谷喬司編著2000『日本近海産貝類図鑑』東海大学出版局

笠利町教育委員会1995『用見崎遺跡』笠利町文化財報告書第20号

2005『安良川遺跡』笠利町文化財報告書第27集

2006『マツノト遺跡』笠利町文化財報告書第28集

木下尚子2000「開元通宝と夜光貝 7～9 世紀の琉・中交易試論」『琉球・東アジアの人と文化（上巻）』高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会

2006「ヤコウガイ交易の検証—6～8世紀の奄美大島3遺跡の分析に—」『先史琉球の生業と交易 2—奄美・沖縄の発掘調査から—』平成14～17年度科学研究費補助金基盤研究（A）

（2）報告書、熊本大学文学部

黒住耐二1987「オカヤドカリ属と宿貝との関係」『沖縄県天然記念物調査シリーズ第29集 あまんオカヤドカリ生息実態調査報告』沖縄県教育委員会

島袋晴美2006「第2節 貝製品」『マツノト遺跡』笠利町文化財報告書第28集、笠利町教育委員会

高梨修 1998「名瀬市小湊・フワガネク（外金久）遺跡の発掘調査」『鹿児島県考古学会研究発表資料—平成10年度—』鹿児島県考古学会

2000「ヤコウガイ交易の考古学」『現代の考古学 5 交流の考古学』朝倉書店

2005『ヤコウガイの考古学』、同成社

中村友昭2006「奄美諸島の古墳時代併行期の土器」『先史琉球の生業と交易 2—奄美・沖縄の発掘調査から—』平成14～17年度科学研究費補助金基盤研究（A）（2）報告書、熊本大学文学部

中山清美 1992「マツノト遺跡発掘調査概報」『奄美考古』第3号、奄美考古学会

1996「マツノト遺跡の発掘調査」『奄美考古』第4号、奄美考古学会

2000「夜光貝の生息する珊瑚礁」『琉球・東アジアの人と文化（上巻）』高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会

2005「安良川遺跡における兼久式土器の型式分類」『鹿児島考古』第39号、鹿児島県考古学会

2006-1「兼久式土器の研究（1）」『鹿児島考古』第40号、鹿児島県考古学会

2006-2「兼久式土器分類試論—奄美大島マツノト遺跡出土土器を中心に—」『先史琉球の生業と交易 2—奄美・沖縄の発掘調査から—』平成14～17年度科学研究費補助金基盤研究（A）

（2）報告書、熊本大学文学部

名瀬市教育委員会2003『奄美大島名瀬市小湊フワガネク遺跡群遺跡範囲確認発掘調査報告書』

若杉あずさ編 1998「Ⅰ 用見崎遺跡Ⅳ」『考古学研究室報告』第33集、熊本大学文学部考古学研究室